

心を打つ

北海道

砂川錬心館

中学2年 平川嵩惺

「まいった。」

稽古をお願いしたとき、先生方は必ずこう言う。どうして負けを認めるのだろう。

ある日、稽古で仲間と一本勝負をすることになった。僕らはお互いに、負けたくない気持ちが強く、良い打突があっても認めず、時間ばかりが過ぎていった。「まいった。」が言えなかった。

中学校に進学すると、小学生の時には一本になっていた打突が、有効打突にならなく、急に勝てなくなった。自分の剣道が通用せずこれまで稽古で積み重ねてきたことが崩れていくような気がした。体の大きさやスピードが違い、速い打突をしなければいけない気持ちに駆られていった。そんな時、強い体当たりを受けて体勢を崩し、軽い骨折をしてしまった。目標としていた大会の直前だったのでみんなに迷惑をかけてしまい、落ち込んだ。ところが、仲間は、信じて待っていてくれた。

「このままではいけない。中学でも通用する剣道を身につけなくては。」

仲間との絆が、落ち込んだ心を前向きに考える力にしてくれた。見取り稽古の日々が始まった。「自分の剣道」を見直すきっかけになった。

「これからは、どのような剣道を目指せばよいだろう。」

なかなか答えは見つからなかった。

そんな時、ある中学生の試合に見入ってしまった。きれいな剣道だった。自分の剣道と比べた時、課題が見えてきたような気がした左腰、左足、左手を意識した打突。それは、剣道をはじめた時に、先生から教わった基本だった。このような打突ができると、自分や相手、審判も納得できるのではないか。ただ相手の防具を打つのではない。相手の心を打つ。相手も納得いかなければ、一本とはいえない。

「心を打つ。」

誰が見ても一本になるような打突を、稽古で身につけようと決めた。基本打ちを大切にすることを心がけた。腰の入った打突、左足の引きつけ、左手の位置。先生に指摘されたことを、ただ守ろうと思った。すると、納得のいく技が出た時には、「自分の心を打つ。」打突ができていることに気づいた。

それからは、基本稽古、応じ技の稽古、しかけ技の稽古や打ち込み稽古で、自分の「心を打つ。」ことができなかつたときは、納得いくまで繰り返していった。次第に相手の心を打つ打突ができることが増え、相手に打たれた時は、「まいりました。」

と素直に言葉が出てくるようになった。

「打って反省、打たれて感謝。」

良い打突ができたら、どうしてあの技を出せたのか、どこが良かったのかを振り返り、打たれた時には、自分の隙を教えてくれた相手に感謝をする。そんな気持ちで稽古に臨むようになった。

先生方の、「まいった。」は「心を打つ。」打突ができたことを教えてくれる。心を打つ打突を身につけ、これからも「正しい剣道」を追い求めていきたい。